

## 参 考 図 書 紹 介

## 植物花粉形態写真の集大成

日本植物の花粉 (第2版). 幾瀬マサ. 2001.  
672 pp. (図 40 pp., 写真 329 pp). 廣川書店,  
東京. 35000 円+税 ISBN 4-567-41140-4

まず著者の幾瀬マサ先生に「おめでとうございます」とお慶びを申し上げ、さらに「有り難うございます」とお礼を申し上げたい。1956年に出された初版は私が欲しくなったとき、とても手の届かない高価な書物として古書店の書棚に並んでいた。そして、十数年前から再版されるとのお話をうかがいながら、完璧主義でおられる先生の真摯なお考えから、今年も今年もと出版はのびつづけていた。そして初版から45年、ようやく私たちはこの本を手にする喜びを味わえるようになったからだ。

概説 (19 ページ) で「花粉の採集方」「プレパラートの作り方」「花粉粒の形態」「花粉粒の種類」「花粉型」が解説される。特に花粉粒の分類や形態の細部にわたる用語の解説は花粉学の基礎となる重要な記述である。

各論では科ごとの花粉形態の特徴が記述され (22 ページ), 続く表に 3080 種の植物の花粉粒の, 型・彫紋模様・大きさ・採集日, 場所, 採集者が 2~数行ずつ一覧表として 164 ページにわたり示されている。

その表は著者が初版までに収集した標本に倍するプレパラート 17270 枚を「No.1 から油浸 (×1000) で観察」し「大きさなどに初版と多少異なるものもあり, これらを再検討した結果を記載」し作成されたという。これは花粉粒の形態的記載として重要であるのはいうまでもないが, 同一の観察者により同一の手法によって記録されたデータベースとしても非常に貴重なものであり, さまざまに利用できる。ちなみに, 私は初版の表から花粉粒のデータを拾い出すことで, 風媒花では雄しべの花粉散布様式により花粉の大きさが異なることを, 顕微鏡をのぞくこととく解明できた。



ハチミツ中や花粉団子の花粉, 花粉症のもとになる空中花粉, 地史的な過去の環境や考古学的な古代の生活の解明のための地層中の花粉など, 花粉の同定の必要性はますます高まっている。

そのような実用面からみると, まず付表「第1表 科別花粉粒一覧表」で, 科別の花粉の特徴が最初の手掛かりを提供する。さらに, 図や写真で属や種に接近し, 花粉の一覧表で同定できるようになる。直接視覚に訴える写真は, 初版をはるかに越えて 293 ページ 790 種もつけ加えられた。それぞれ極や赤道面からの写真や彫紋のアップなど, 花粉の同定の決め手となる特徴を明瞭にとらえている。以前, 先生の研究室をおたずねしたとき, 大きな顕微鏡と, それと直結しているカメラの前で実際に撮影されている様子を拝見したことがある。先生は生の花粉を手早く染色し顕微鏡で観察され, よしとなるとすぐにシャッターを切っておられた。プレパラートは 17270 枚とのことだが, 写真の枚数はその何倍だろうか, その中から選りすぐった写真であり, 見ていると花粉がいろいろなことを語りかけてくるように思える。

今『日本植物の花粉 (第2版)』を前に, コピーでなく実物の本を手にする喜びで一杯である。  
(田中 肇)

## 参 考 図 書 紹 介

### ハチミツの治療的効能

Munn, P. & R. Jones (eds.) Honey and healing. IBRA, Cardiff. 49 pp. ISBN 0 85092 240 8.

国際ミツバチ研究協会 IBRA がシリーズで出している、約 20cm 角の変形版の小冊子。医薬としてのハチミツについて要領よくまとめられている。トップ記事は編者でもある IBRA の代表 Jones 氏による歴史的概観である。ハチミツがいかに古くから、世界中のいたるところで医薬として使われてきたか、そして、いつ頃から、科学になったかが紹介されている。とはいえ、この手の内容は民話の世界と科学がないまぜになった状態であり、続く 6 編もそれぞれ説得力があるが、述べられた内容を IBRA が保証するわけではない、と断り書きがあるのは、それなりにまじめな態度だといえよう。引用された文献類のほとんどは IBRA 図書室で利用できることがチャッカリ宣伝されている。

続く 2 編はニュージーランド・ワイカト大学の Molan 博士による、ハチミツが医薬として使える根拠を述べたものである。まず 97 編の引用文献を用いて、ハチミツが何に使われているかを示し、続いてその科学的な根拠を 155 編の文献を用いて説明している。同博士は 2001 年 10 月に来日され、同様の内容でセミナーを行っている。評者もその一部を伺うチャンスがあったが、例示を含めて大変説得力のあるもので、これまで消極的であった評者に、もっと「効く」といってもよいかも知れない、と思わせるものであった。

ハチミツに期待できる医用効果としてあげられているのは、殺菌力、免疫力向上、抗炎症作用、抗酸化性、細胞成長活性化などの特性である。これらが、実際に外傷、潰瘍、胃炎など各種の症状におよぼす効果が述べられている。これらの解説ののち、伝統的にはまさに医薬として扱われてきたハチミツが、現代では“代替”、“相補”的な利用にとどまっていることを指摘

し、これらを越えるには、ハチミツ自体がもつ特性の違いまで留意したデータが必要であると述べている。

次の 2 編は IBRA の隣にあるウェールズ大学からの寄稿である。各種の原因による外傷が治っていく過程を追って、ハチミツがその過程にどのように関与できるのかを解説している。後半の Jones 博士の論説はわずか 2 ページの短編であるが、癒傷過程に血液中のマクロファージなど血球成分やそれらが引き起こす一連の現象がいかに関与するかを述べて、新しい点を示しているように思われる。もう一編では外傷としてのやけどが上げられている。やけどをしたらすぐに水で冷やし、出来るだけ早く医者の手当を受けるというのが鉄則である。ただし、治療薬としてのサルファダイアジンとハチミツを比べると、癒傷の程度は圧倒的にハチミツが優れているデータが示されている。小さなやけどなどにハチミツを塗る経験は多くの方のものであろうが、それを裏付けてくれている。

ハリナシバチの蜜が白内障の治療薬になるという記事は、目新しい。ハチミツのフラボノイドが主な効果成分として予想され、それが、普通のハチミツよりもハリナシバチのものに多いので、ハリナシバチのいる地方では、点眼用の蜜が市販されているそうである。ベネズエラの Vit 博士の報告である。

最後についている付録は、ミツバチ生産物の危険度の見直しをしているニュージーランドから、乳児のボツリヌス症にハチミツが関わっている例がほとんどないという短報である。

評者は、各種のミツバチ生産物が代替医療に活用されるように見直しが進んでいることを歓迎しているが、日本ではハチミツを利用した医療の報告例はほとんど目にしない。このような小冊子でも、一里塚になるのではないかと感じた次第である。  
(松香 光夫)